

令和元年6月5日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02544

研究課題名(和文) 談話における話者の言葉の選択と役割理論

研究課題名(英文) The speaker's choice of words in a given context in relation to Role Theory

研究代表者

尾鼻 靖子 (Obana, Yasuko)

関西学院大学・理工学部・教授

研究者番号：60362141

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：人は言葉を選ぶ際に、相手との対話の中で自分が取る役割や立場に影響されることがある。敬語の生起はその典型的な例である。敬語は話者が相手に対してどのような立場であるかを示す指標である。挨拶言葉である本研究では、ドラマや映画、インタビューなどをデータに、対話の中でどのような言葉の選択をしているのか、そしてそれは何故なのか、を明らかにするのが目的であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語のポライトネスや「クレル」の分析、さらに会話の中で2人が同時参加して一つの発話を織りなすという現象などを研究テーマに、論文を発表した。従来当たり前として受け入れられてきた通説に対して、異なる観点からそれぞれのテーマに取り組んだという点で、オリジナル性の高い成果を得られた。例えば「クレル」は従来「恩恵」として扱われてきたが、この助動詞には外から内に向かうベクトルはあるものの、恩恵の意味は本来なく、恩恵を示すコンテキストがあるから「クレル」がそれを強調するだけであると主張した。

研究成果の概要(英文)：The choice of certain expressions in a given context often reveals what stance or role the speaker is taking in relation to the other interactant. By applying a role theory, I have investigated how roles and selected expressions are intertwined.

研究分野：言語学

キーワード：ポライトネス 敬語 役割 アイデンティティ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景：社会言語学や談話分析の分野では、identity という概念を適用して、言葉の選択が話者の社会的立場や社会的なカテゴリ（女性、民族、社会的地位など）に属するのを見極める分析が盛んである。例えば、インド人が英語とヒンディー語を使い分けるのは、国際的なものを意識した場合とインド人同士の身内と判断した場合の違いからくると言われている。方言を使うか標準語を使うかというのもそれに似通ったものがある。
しかし、identity というのは、社会学的に明らかな立場だけを示すのであろうか。また、言葉の選択はそういう social identities だけに限られるのであろうか。それよりさらに、その場面における役割（議長、コーディネーター役など）や、話者が対話者に対してその場で取るスタンスなども identity が働いているのではないかと、という疑問が当研究のきっかけとなった。例えば、いわゆる speech level shifts に見られる敬語と非敬語が同じコンテクストに現れる現象は、言語のシフトが話者の心理的シフトを示しているのではないかと考え、そのシフトに応じて話者はその場で異なるアイデンティティを提示しているのだと判断する。また、「よろしく申し上げます」という決まり文句も、話者が相手との関係によって生じた役割を演じる言葉であると考え、その話者の役割範囲内であればこの決まり文句を発話することができると思う。そのような話者の取るスタンスを、interactional identity（相互作用的アイデンティティ）と仮に名付けた。様々な場面で identity shifts が起こる現象を分析することで identity の分類・細分化ができるのではないかと考えた。
2. 研究の目的：本研究の目的は、アイデンティティ理論のひとつである Symbolic Interactionism（SI：シンボリック相互作用理論）を適用して、談話における話者の言葉の選択の背景を探ることであった。上記に述べたように、従来の社会言語学や談話分析では、職業、性差、社会的地位などの social identities を談話から見出すというのが通常である。しかし、本研究ではさらにコンテクストにおいて話者の取るスタンスや心理的役割が、ある一定の言語形式を選択するという点に焦点をあて、SI理論がどこまで適用できるのかを探索するのが目的であった。
3. 研究の方法：データはドラマや映画を書き起こし、さらにカジュアルなインタビュー（20件、各20分程度）を行いそれも書き起こした。またネットにアップロードしてある会話のコーパスなども利用し、分析をした。一方で、SI理論では社会学を扱うため、アイデンティティの問題は社会的な役割（職業、民族、性差、職場での地位）に限られているので、このアイデンティティをさらに interactional identities へと下位区分する必要があったので、SIの第一人者である学者 J. Turner 氏のアドバイスを受けながら分類を試みた。
4. 研究成果：分析の途中で興味深い言語現象を見出したときにはそれも研究対象となったが、おおむね、上記の研究目的、方法に従って、次の項目について考察し、学会で発表し、論文にまとめた。

日本語のポライトネスについて

- (1) 敬語：敬語にはポライトネス現象においてどのような位置を占めるのか。敬語はストラテジーではなく、指標である。敬語という言葉があるのではなく、ストラテジーを駆使して言語的に築いた発話に敬語という marking を施したものである。意味論的にはゼロである。
- (2) スピーチレベルシフトにおける敬語形式の語用論的機能：従来スピーチレベルシフトは、敬語の静的な規範性という見解に異議を唱える役割をになってきた。シフトは同じ会話でおこる敬語・非敬語の使用を示すが、対話がダイナミックに変化するのと同調して、敬語・非敬語の使用もダイナミックに変化するという、敬語使用の柔軟性を示す例として注目を集めている。しかし、研究代表者はシフト現象の背景は規範的な敬語（例：目上に使用するという社会的決まり）を基にしており、両者は別のものであるとして存在するのではなく、シフト現象は規範的敬語と連続したものであることを主張した。
- (3) 敬語の起源について：敬語の起源を「祝詞」に求め（浅田説）その中で敬語使用の動機を探り、それが現代敬語にも残っていると主張。

「クレル」の機能について：従来の「クレル」は恩恵として扱われてきたが、「クレル」には動作や物が外から話者の方へと向かうベクトルでしかなく、コンテクストに応じてそれが「恩恵」の内容であるから恩恵を強調し、また、内容が「迷惑」であることを強調したりする機能しかないことを主張した。相手を卑下するような場合には、「脅威」すら示す役割もあると主張した。

感謝表現としての「すみません」と「ありがとう」の境界線：感謝表現で使用される「ありがとう」と「すみません」という表現はどのようなコンテクストの制限があるのか、

どのような語用論的意味を持つのかについて、シンボリック相互作用理論における役割理論を適用して分析した。

Joint Utterances について：これは SI の理論は適用したものでないが、言語現象のデータを分析するうちに見出したトピックである。従来会話分析では、二人がひとつの発話 Joint utterance を作る際には、同じ方向であり 2 番目の話者が 1 番目の話者を継いで発話を終結する、と考えられてきたが、本研究では、2 番目の話者が 1 番目の話者の意図する反対のことを言うこともあるし、二人がリレー式に 2 つ以上の発話をひとつにくっつけてしまう場合もあることを主張。

敬語使用と皮肉：これは 2018 年度の後半から始めたもので、NY で学会発表後、執筆を始め、2019 年 3 月に海外研究協力者と一緒に論文の方向をもう一度定めた。従来「皮肉」を生み出すには、発話の文字通りの意味と話者の意図とが食い違うという命題が存在することが前提として必須であることとされてきた。しかし、その食い違いがなくとも敬語を導入することで皮肉を生み出すことが可能であることを発見した。論文は現在ほぼ仕上がっている。

なお、2019 年 2 月に英国の Routledge 出版社と著書出版に向けて契約を交わした。タイトルは Japanese Politeness: An Enquiry (約 10 万語。英語) 2020 年には提出することになっている。2021 年には出版されるという見込みである。これは日本語のポライトネスについて理論的にまとめたものである。従来のポライトネス理論を日本語のポライトネスから見てどのように捉えられるのか、また日本語の敬語やストラテジーはどのように包括して理論づけられるのかというのが主眼で、日本語の例を多く提示することで日本語のポライトネスの実態を読者に示すという目的を持って執筆している。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 10 件)

1. Yasuko Obana (2019) Politeness. In: Patrick Hendrich (ed.) *Routledge Handbook of Sociolinguistics of Japanese*. London: Routledge, 248-263. [共著] (査読有り)
2. Yasuko Obana & Michael Haugh (2018) Malefactive Uses of Giving/receiving Expressions: The Case of *te-kureru* in Japanese. *East Asian Pragmatics*, 3(2), 201-231. (査読有り)
3. 尾鼻 靖子 (2018)『現代日本語における敬語の起源の形跡』 関西学院大学言語教育研究センター紀要「言語と文化」第 21 号, 45-60. (査読無し)
4. Yasuko Obana (2017) Japanese Honorifics Re-re-visited. *Journal of Politeness Research*, 13(2), 4-31. (査読有り)
5. 尾鼻 靖子 (2017)『授受表現「クレル」を使った皮肉・非難表現について：「クレル」の恩恵性を再考する』 関西学院大学言語教育研究センター紀要「言語と文化」第 20 号, 1-15. (査読無し)
6. Yasuko Obana (2016) Speech level shifts in Japanese: A different perspective – The application of Symbolic Interactionism. *Pragmatics* 26(2), 247-290. (査読有り)
7. 尾鼻 靖子 (2016)『日本語の敬語再・再考：役割アイデンティティの観点から』 関西学院大学言語教育研究センター紀要「言語と文化」第 19 号, 31-46. (査読無し)
8. 尾鼻 靖子 (2015)『感謝表現としての「ありがとう」と「すみません」：シンボリック相互作用理論を適用して』 関西学院大学言語教育研究センター紀要「言語と文化」第 18 号, 15-28. (査読無し)
9. Michael Haugh & Yasuko Obana (2015) Joint utterances, (dis)affiliation and the participation order. *Text & Talk*, 35(5), 597-619. (査読有り)

- 10 . Yasuko Obana & Michael Haugh (2015) Co-authorship of joint utterances in Japanese. *Dialogue and Discourse*, 6(1), 1-25. (査読有り)

[学会発表](計 5 件)

1. Yasuko Obana & Michael Haugh (2018) Japanese honorifics and sarcasm: Threatening and downgrading by ostensibly exalting the other. The 4th International Conference of American Pragmatics Association, University at Albany, State University of New York.
2. Yasuko Obana (2017) (依頼講演) オーストラリア、クィーンズランド大学にて、1 時間の講演を行った。題名: Malefactive uses of te-kureru in Japanese.
3. Yasuko Obana (2017) The origin of honorifics entailed in modern Japanese. International Pragmatics Conference, Belfast, N. Ireland.
4. Yasuko Obana (2015) Japanese honorifics as the implementation of role-identities. Pragmatics Conference, Christian University, Antwerp.
5. Yasuko Obana (2015) (招待講演) ルーマニアのクリスチャン大学にて、日本語・文化・教育の学会で keynote speaker として講演。題名: Japanese pragmatics: formulae, greetings and other set phrases.

[その他]

上記の学会発表のうち、1 番目と 4 番目は、パネルの発起人となって、前者では 8 人の発表者がパネルに参加して発表した。後者では 3 人でひとつのパネルを作った。パネルの司会役も務めた。

6 . 研究組織

(1)研究分担者

(2)研究協力者

研究協力者氏名: マイケル・ホー, School of Languages and Studies, University of Queensland, Australia.

ローマ字氏名: Professor Michael Haugh

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。